

Subject : **Japanese**

Production of Courseware
e- Content for Post Graduate Courses

Paper No. 02 : **日本語学 (Japanese Linguistics)**

Module 12 : **ヴォイス (Voice)**



ज्ञान-विज्ञान विमुक्तये



Development Team

Principal Investigator: **Prof. Anita Khanna**
Jawaharlal Nehru University, New Delhi

Paper Coordinator: **Prof. Prashant Pardeshi**
The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Content Writer: **Prof. Shingo Imai**
University of Tsukuba


Content Reviewer: **Prof. Prashant Pardeshi**
The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Japanese

Japanese Linguistics

ヴォイス (Voice)

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	ヴォイス (Voice)
Module ID	JPN-P02-M12
Quadrant 1	E-Text

 ePathshala
पाठशाला
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

ヴォイス (Voice)

こと 異なる。A は、(1) ではガ格、(2) と (3) ではニ格になっている。B は (1) と (3) では
 かく かく どうし かたち こと うけみ かたち うけみけい
 ヲ格、(2) ではガ格になっている。そして、動詞の形も異なる。受身の形（受身形）
 ごだん どうし もと どうし いちだん どうし
 はグループ I（五段）動詞では元の動詞に **-are-**、グループ II（一段）動詞では **-rare-** を
 つ 付ける。グループ I の「なぐる」は **nagur-are-ru**、グループ II の「食べる」は **tabe-rare-**
 しえき かたち しえきけい ごだん どうし もと どうし
ru になる。使役の形（使役形）はグループ I（五段）動詞では元の動詞に **-ase-r-**、グ
 いちだん どうし つ
 ループ II（一段）動詞では **-sase-** を付ける。グループ I の「なぐる」は **nagur-ase-r-u**、
 た
 ループ II の「食べる」は **tabe-sase-ru** になる。

いじょう じたい かか ひと もの がわ びょうしゃ ちが
 以上のようにヴォイスは事態に関わる人や物などをどちら側から描写するかの違い
 あらわ どうし ぶんぼう しゅご こうたい かく こうたい どうし けいたい
 を表す動詞の文法カテゴリーである。主語が交替し、格が交替し、動詞の形態が
 きそくてき こうたい とくちよう も しえき うけみ いっしょ しえきうけみ
 規則的に交替するという特徴を持つ。(4) のように使役と受身が一緒になる使役受身も
 た しえき うけみ あらわ
 ある。「食べさせられる **tabe-sase-rare-ru**」では、**-sase-** が使役を、**-rare-** が受身を表す。

こ ははおや やさい た
 (4) 子どもが母親にきれいな野菜を食べさせられた。

じたい こと がわ えが どうさ ほうこう ほんたい い み
 事態を異なる側から描くには、(5) と (6) のように動作の方向が反対の意味になる
 じゅじゅどうし つか かく こうたい
 「あげる」「もらう」などの授受動詞などを使うこともできる。このとき、格も交替す

^{どうし うけみけい しえきけい} ^{きそくてき はせい} ^{こと ご つか}
 るが、動詞は受身形や使役形のように規則的に派生するのではなく、異なる語を使うの
^{ごいてき い}
 で、語彙的なヴォイスと言われる。

(5) A が B にプレゼントをあげた。

(6) B が A にプレゼントをもらった。

^{じどうし たどうし つか} ^{おな じたい こと がわ か} ^{じどうし た}
 自動詞と他動詞を使って、同じ事態を異なる側から描くこともできる。自動詞と他
^{どうし けいたい いちぶ ごこん きょうゆう}
 動詞は形態の一部（語根）を共有する。

(7a) 田中さんが花瓶を割った。

(7b) 花瓶が割れた。

(8a) 田中さんが鉛筆を立てた。

(8b) 鉛筆が立った。

^わ ^わ ^{ごこん きょうつう}
 (7a) の「割る war-u」と (7b) の「割れる war-eru」では、語根 war- が共通していて、
^{たどうし} ^{じどうし} ^{あらわ} ^た
 -u が他動詞であることを、-eru が自動詞であることを表しているが、(8a) の「立てる
^た ^{たどうし} ^{あらわ} ^{じどうし} ^{あらわ}
 tat-eru」と (8b) 「立つ tat-u」では、-eru が他動詞を表し、-u が自動詞を表している。

^{じどうし たどうし うけみけい しえきけい} ^{きそくてき こうたい}
 このように自動詞と他動詞は受身形や使役形のように規則的に交替するものではないの

で、授受動詞と同様に、語彙的なヴォイスである。しかし、授受動詞の「あげる」や

「もらう」が全く異なる形態であるのに対し、自動詞と他動詞は「割る war-u」と

「割れる war-eru」の war- のように語根を共有する。このことから、自動詞と他動詞

は、授受動詞などの形態的に全く異なる語彙を使う語彙的なヴォイスと受身、使役など

の規則的に形態が変わる文法的なヴォイスとの中間的な存在であると言える。

可能文、自発文も動詞の規則的な交替、格の交替というヴォイスの特徴を持っている

。 (9b) は可能文の例である。 (9a) の「英語を」のヲ格は、可能文ではヲ格のまま、ま

たはガ格に交替する。「英語が」が主語であるかどうかについては専門家の間でも異

なる意見がある。 (9c) のようにすると、ガ格が二つ現れる。この文では、「田中さん

が」が主語であることは間違いない。しかし、「英語が」もガ格で表されるので、

主語のようでもあるが、 (9b), (9c) も (9a) と同じく、「田中さん」の側から事態を描写

しているの、主語は「田中さん」のままと考えるのがいいだろう。そうすると

「英語が」はガ格だが、主語ではなく、目的語と考えたほうがいいだろう。

(9a) 田中^{たなか}さんが英語^{えいご}を話す^{はな}。

(9b) 田中^{たなか}さんは英語^{えいご} {が/を} 話せる^{はな}。

(9c) 田中^{たなか}さんが英語^{えいご}が話せる^{はな}ことを知^しっていますか。

可能形はグループ I (五段) 動詞の語幹に **-er-**, グループ II (一段) 動詞の語幹に **-rare-** を付ける。グループ I の「話す」は **hanas-er-u** になる。グループ II の「食べる」は **tabe-rare-ru** になる。グループ II の動詞は受身形と可能形が同じになってしまう。

受身形「食べられる」 **tabe-rare-ru** と区別できるように、可能形は **-rare-** ではなく、 **-re-** を付けて「食べれる」 **tabe-re-ru** と言う人も多くなってきた。これは「ら抜き言葉」と言われ、間違った使い方だと考える人も多い。話し言葉では使われるが、書き言葉ではあまり使われない。

自発文は自然にそうなるという意味を表すものである。自発形は受身形と同じ形に変化するので、規則的ではあるが、自発文に使われるのは「思う、思い出す、悔やむ、考える、感じる」などの思考・感情を表す少数の動詞に限られていて、生産性が低い。(10a) のガ格, ヲ格が, (10b) の自発文ではそれぞれニ格, ガ格に替わっている。

(10b) の主語は「私」と考えられるが、「私には」は言わないのが普通である。

(10a) ^{わたし} (私が) ^{むかし} 昔 ^{おも} を ^だ 思い出す。

(10b) ^{わたし} (私には) ^{むかし} 昔 ^{おも} が ^だ 思い出される。

^{いじょう} 以上のように、^{かのうぶん} 可能文と^{じはつぶん} 自発文は^{どうし} 動詞の^{きそくてき} 規則的な^{こうたい} 交替、^{かく} 格の^{こうたい} 交替という^い ヴォイスの
^{とくちょう} 特徴を持ってはいるが、^{しゅご} 主語の^{こうたい} 交替がないことから、^{てんけいてき} 典型的な^い ヴォイスとは言えない。

^い 以下では、^{てんけいてき} 典型的な^{うけみ} ヴォイスである^{しえき} 受身、^み 使役について見ていく。

2. ^{うけみ} 受身

^{うけみ} 受身には、^{ちよくせつうけみ} 直接受身、^{かんせつうけみ} 間接受身、^{もちぬし} 持ち主の^{うけみ} 受身の^{しゆるい} 3種類がある。

2.1 ^{ちよくせつうけみ} 直接受身

^{のうどうぶん} 能動文 (11a) の「^{うけみぶん} A が」が^{のうどうぶん} 受身文 (11b) では「^{うけみ} A に」になり、^{のうどうぶん} 能動文の「^{うけみ} B を」が^{のうどうぶん} 受身文では「^{のうどうぶん} B が」になる。このように^{こうせい} 能動文を構成する^{こう} 項から^{つく} 作られる^{うけみ} 受身を^{ちよくせつうけみ} 直接受身と呼ぶ。

(11a) A が B をなぐった。

(11b) B が A になぐられた。

のうどうぶん かく かく ばあい のうどうぶん うけみぶん
 能動文の二格がガ格になる場合もある。能動文 (12a) の「Bに」が受身文 (12b) では「Bが」になっている。

さわ
 (12a) AがBに触った。

さわ
 (12b) BがAに触られた。

「～ガ～ニ～ヲ贈る」のような3項動詞の場合には、二格をガ格にする場合とヲ格をガ格にする場合の2種類の直接受身が作られる。

たなか さとう おく
 (13a) 田中さんが佐藤さんにプレゼントを贈った。

さとう たなか おく
 (13b) 佐藤さんが田中さん {から/に} プレゼントを贈られた。

たなか さとう おく
 (13c) プレゼントが田中さん {から/*に} 佐藤さんに贈られた。

ひぶんぼうてき しめ
 (*のマークは非文法的であることを示す。)

のうどうぶん かくしゅご たなか たなか
 能動文 (13a) のガ格主語「田中さんが」は、(13b) では「田中さんから」または
たなか たなか かく つか かく
 「田中さんに」になるが、(13c) では「田中さんから」になり、二格は使えない。二格
ちようふく たなか さとう う て わ
 が重複すると、「田中さんに」と「佐藤さんに」のどちらが受け手が分からなくなっ
 てしまうからである。

のうどうぶん しゅご うけみぶん ぶん あらわ どうさしゅたい ふめい
 能動文の主語は、受身文になったときに文に現れないこともある。動作主体が不明

ばあい どうさしゅたい かんしん ばあい ぶんみやく わ あらわ ひつよう ばあい
 な場合、動作主体に関心がない場合、文脈から分かるので表す必要がない場合などが
 ある。

たてもん え どじだい た
 (14) この建物は江戸時代に建てられました。

たなか
 (15) 田中さんはなぐられてケガをした。

いりぐち せいりけん くぼ
 (16) 入口で整理券が配られた。

どうさしゅたい だれ わ ばあい だれ どうさ しゅたい
 (14) は動作主体が誰か分からない場合、(15) は誰になぐられたかという動作の主体に

かんしん む ばあい どうさしゅたい たど かかり ひと すいそく
 関心が向いていない場合、(16) は、動作主体が例えば「係の人」のように推測できる

だいじ じょうほう あ しめ ひつよう ばあい
 が、大事な情報ではないので、敢えてそれを示す必要がない場合である。

2.2 間接受身

かんせつうけみ のうどうぶん こう ひと ふ たなか
 間接受身では、能動文にない項が一つ増える。(17b) では「田中さんは」が、(18b) で

わたし ふ のうどうぶん ふく
 は「私は」が増えている。これらがもとの能動文に含まれていないことは (17c), (18c)

ひぶん わ かんせつうけみ かく こう ちよくせつうけみ かく ふ か
 が非文になることから分かる。(間接受身の二格は項であり、直接受身の二格は付加

し さんしょう のうどうぶん こう かんせつうけき
 詞である。これについては **Quadrant3** を参照。) もとの能動文にはない項が間接的に

えいきょう う あらわ かんせつうけみ よ かんせつうけみ めいわく うけみ
 影響を受けることを表しているのので、間接受身と呼ばれる。間接受身は迷惑の受身と
 い めいわく ふりえき い み ともな じどうし た どうし かんせつ
 も言われ、迷惑・不利益の意味を伴う。なお (17b) は自動詞の、(18b) は他動詞の間接
 うけみぶん
 受身文である。

ちか こ な
 (17a) (近くにいた) 子どもが泣いた。

たなか こ な
 (17b) 田中さんは子どもに泣かれた。

こ たなか な
 (17c) *子どもが田中さんを泣いた。

さとう ほか ひと さき ろんぶん はっぴょう
 (18a) 佐藤さんが (他の人より先に) 論文を発表した。

わたし さとう ろんぶん はっぴょう
 (18b) 私は佐藤さんに論文を発表された。

さとう わたし ろんぶん はっぴょう
 (18c) *佐藤さんが私に論文を発表した。

かんせつうけみ しゅご めいわく かん うじょうぶつ かぎ どうさ
 間接受身の主語は、迷惑を感じることができる有情物 (animate) に限られる。動作

しゅ ばあい うじょうぶつ あめ ゆき かぜ てんこう かか
 主もほとんどの場合、有情物であるが、(19)、(20) のように雨や雪や風などの天候に関

しぜんげんしょう どうさしゅ れいがいてき めいわく ふりえき い み ともな かんせつうけみ
 わる自然現象も動作主になれる。例外的に迷惑・不利益の意味を伴わない間接受身が

じどうし ふ うけみ ばあい
 ある。(20) の自動詞の「吹く」の受身の場合である。

(19) 田中さんは雨に降られて、ずぶぬれになった。

(20) 夕方、涼しくなったので、私たちは風に吹かれながらしばらく歩いた。

2.3 持ち主の受身

所有格「の」を含む能動文が受身文になったものを**持ち主の受身**と呼ぶ。所有格「の」は (21a) のような所有物、(22a) のような体の一部、(23a) のような人の関係を表す場合がある。

(21a) 先生が田中さんの論文をほめた。

(21b) 田中さんが先生に論文をほめられた。

(22a) 隣の人が私の足を踏んだ。

(22b) 私は隣の人に足を踏まれた。

(23a) 先生が私の子どもを呼び出した。

(23b) 私は先生に子どもを呼び出された。

も ぬし うけみ ぶん しよゆうかく かく しゅだいか
 持ち主の受身は、もとの文の所有格「の」がガ格（または主題化された「は」）に

か しゅご たと わたし しゅご わたし
 変わり、主語になる。例えば (23a) の「私の」が、(23b) では主語「私は」になってい

わたし こ しゅご ちよくせつうけみ
 る。「私の子どもを」を主語にすれば、(23c) のように直接受身になる。

わたし こ せんせい よ だ
 (23c) 私の子どもが先生に呼び出された。

も ぬし うけみ ちよくせつうけみ わたし こ しゅご
 持ち主の受身は、直接受身のように「私の子どもを」を主語にはしていないが、

いちぶ しゅご ちよくせつうけみ かんせつうけみ あいだ ちゆうかんてき
 その一部を主語にしていることから、直接受身と間接受身の間にある「中間的な

うけみ よ
 受身」と呼ばれることもある。

も ぬし うけみ い み てん ちよくせつうけみ に も ぬし うけみ
 持ち主の受身は意味の点では、直接受身に似ている。持ち主の受身は、(21b) のよ

よ い み わる い み い か れい ちよくせつうけみ
 うに良い意味にも、(22b) のように悪い意味にもなる。以下の例のように直接受身でも、

よ わる い み どうし も い み ぶんみやく き ふりえき こうむ
 良い・悪いの意味は動詞の持つ意味や文脈によって決まるのであって、不利益を被る

い み おんけい う い み
 という意味 (24) にも、また、恩恵を受けるという意味 (25) にも、そしてどちらでもな

い み
 い、ニュートラルな意味 (26) にもなる。

さとう せんせい
 (24) 佐藤さんは先生にしかられた。

さとう せんせい
 (25) 佐藤さんは先生にほめられた。

さとう せんせい よ
 (26) 佐藤さんは先生に呼ばれた。

いっぽう かんせつうけみ ひと れいがい のぞ かなら めいわく い み ともな い み
 一方，間接受身は（一つの例外を除いて）必ず迷惑の意味を伴う。よって，意味
 てん もちぬし うけみ かんせつうけみ ちよくせつうけみ ちか も ぬし うけみ かく
 の点では，持ち主の受身は間接受身よりも直接受身に近い。（持ち主の受身の二格の
 せいしつ ちよくせつうけみ かく ちか さんしやう
 性質も直接受身の二格に近い。Quadrant3を参照。）

3. 使役

しえきぶん のうどうぶん こう しえきしゆ くわ きやうせい い み きよか
 使役文では，能動文にはない項が使役主として加わる。強制の意味のほか，許可・
 ほうにん ほうち せきにん あらわ きやうせい れい きよか れい こ
 放任，放置・責任などを表す。(27b)は強制の例である。(28b)は許可の例で，子ども
 た い ゆる い み ほうにん れい
 がケーキを食べたいと言ったときに，それを許すという意味である。(29b)は放任の例
 こ す たい じゃま い み
 で，子どもが好きなことをすることに対して，それを邪魔しないという意味である。
 ほうち やさい くさ あらわ せきにん れい
 (30b)は放置したことによって野菜が腐ったことを表している。(31b)は責任の例で，
 ははおや こ けが しむ こ けが じたい
 母親が子どもに怪我をするように仕向けたわけではないが，子どもが怪我をする事態を
 さ たい ははおや せきにん かん あらわ
 避けられなかったことに対して母親が責任を感じていることを表す。

(27a) ^こ子どもが^{にんじん}人参を^た食べた。

(27b) 母親は (嫌がる) ^こ子ども {に／*を} ^{にんじん}人参を^た食べさせた。

(28a) ^こ子どもが^たケーキを^た食べた。

(28b) 母親は^こ子ども {に／*を} ^{だいす}(大好きな) ^たケーキを^た食べさせた。

(29a) ^こ子どもが^{あそ}遊んだ。

(29b) 母親は^こ子ども {に／を} ^す(好きなだけ) ^{あそ}遊ばせた。

(30a) ^{やさい}野菜が^{くさ}腐った。

(30b) ^{わたし}私は (冷蔵庫に入れるのを忘れて) ^{わす}野菜 {*に／を} ^{くさ}腐らせてしまった。

(31a) ^こ子どもが^{けが}怪我をした。

(31b) 母親は (不注意で) ^こ子ども {に／*を} ^{けが}怪我をさせた。

これらの能動文と使役文のペアを見ると、使役文では、「母親は」「私は」という

^{こう}項が増えている。

た どうし しえきぶん こ にんじん た ちょうふく
 他動詞の使役文 (27b) では「子どもを人参を食べさせた」のような「を」の重複は
 にほんご ゆる しゅたい かく あらわ どうよう
 日本語では許されないため、もとの主体は二格で表される。(28b), (31b) も同様であ
 る。

じどうし しえきぶん しゅたい かく かく あらわ かく つか
 自動詞の使役文では、もとの主体は二格またはヲ格で表されるが、二格が使えるの
 しゅたい いし ぼあい こ いし
 は、もとの主体に意志がある場合だけである。(29b) では、「子ども」に意志があるの
 かく つか やさい いし かく つか どうよう
 で、二格が使えるが、(30b) では、「野菜」に意志はないので、二格は使えない。同様
 わら しゅたい こ じぶん いし しぜん
 に、(32) の「笑う」は、主体である「子ども」が自分の意志ですることではなく、自然
 しょう かく つか しゅたい こ はたら
 に生じることであるため、二格が使えない。(33) のように主体である「子ども」に働
 いし かん きょうせいとき はたら いみ ぼあい かく つか
 くという意志が感じられず、強制的に働かされる意味になる場合にも、二格は使いに
 くくなる。

ははおや こ わら
 (32) 母親は子ども {を/*に} 笑わせた。

ははおや こ はたら
 (33) 母親は子ども {を/?に} 働かせた。

ぶん ふしぜん しめ
 (?のマークはその文が不自然であることを示す。)

み たいおう のうどうぶん そと しえきしゅ ついか たい
 これまでに見た、対応する能動文に外から使役主が追加されるタイプに対して、
 たいおう のうどうぶん なか めいしく しえきしゅ
 対応する能動文の中にある名詞句が使役主になるタイプがあり、(34b), (35b) のような

れい 例がある。このタイプの使役文は、感情を引き起こす要因を表す。感情に関する

動詞が使われ、能動文の動詞が取る二格が使役文の主語になる。

(34a) 彼はその知らせに驚いた。

(34b) その知らせは彼を驚かせた。

(35a) 聴衆は彼の演説に感動した。

(35b) 彼の演説は聴衆を感動させた。

無生物が主語になり、人が目的語になる文は不自然になる場合が多い (Quadrant 3

参照) が、(34b)、(35b) のように感情を表す動詞の場合には自然になることもある。

ただし、話し言葉ではあまり使われない。

キーワード:

ヴォイス 能動 受身 接辞 格の交替 項 直接受身 間接受身 持ち主の受身

使役 可能 自発 強制 受容
